

墓をつくる

父の思い出

柳瀬川ひろし

正輝
高田
小島の子
昭和二十六年八月九日
父の長女 幸子
万知雄 塔の子
平成二十九年十一月五日

小さな畑が何枚も続く斜面を左手に見ながら、軽トラックがやっと通れるほどの坂道を二度折れて百メートルも登ると、大きな梅の木が西の方角を見下ろすように立っている土地に出た。

「なかなかえいろう」

父が珍しく微笑んで振り向いた。

私は、梅の木のことなのか、土地のことなのか、景色のことなのか正直分からなかった。けれど、いいねえと相槌を打ったものだった。

今なら分かる。

父は西に大川を見下ろせるこの土地が好きだったのだと。

大川の水面は我が家からでは見ることができない。大雨で盛り上がるほどに増水したときであれば話は別なのだが。

大川は車を運転することのなかった父が、好んで遊び場にした身近な川だ。

仁淀川の上流部で生まれ育った父は、アユを玉じゃくりで捕ることを何よりの楽しみとしていた。

それは、一個の鉛玉の上に返しのない三本の針を一つにまとめたものを付けただけのシンプルな仕掛けだ。箱メガネで川の中を覗きながら短めの竿に付けたこの仕掛けをアユの縄張りに投入しては通りがかったアユをしゃくる(引っかける)漁だ。

父はこれが得意だった。

私が物心つく頃には、よく川に連れて行ってくれた。アユ漁やハヤ釣りのお供だ。

大川は仁淀川の支流だが、父が子どもの頃遊んでいた仁淀川のようにアユが豊富ではなかったし、それほどの清流とも言えない川だった。

苔でつるつるになった瀬に入りアユを追って歩いたり走ったりするのは疲れるはずなのだが、父も私も、それが好きなので全く疲れを感じなかった。

鮎を追って下流から上流へと随分移動した気がするが、ここから眺めるとそのすべてが小さな絵地図のように見えた。

晩年と言える年齢に差しかかり、以前のように身軽に川を歩き回ることが難しくなった父は、ここから川を一望することで往時を懐かしんでいたのかもしれない。

私がこの場所を頻繁に訪れるようになったのは、四十代後半になり両親の介護について真剣に考えるようになってからのことである。

春にはこの梅の木が薄ピンクの可憐な花をこぼれんばかりに付けた。その実は南高のように大粒で父のお気に入りだった。

父が亡くなる二、三年前のことだが、何かの折に墓をどこに造ろうかという話になった。おそらく梅をもぎに二人でここに登って来たときのことだ。

父は、ここは見晴らしもよく最高だが、歳取って登って来るのは大変ぞというようなことをつぶやいた。私は、歳を取って登って来るのが大変だと感じるのが自分なのだということに、

後になって気付いた。墓を造ろうと発想した父こそが、多分その墓に入るであろう最初の人なのだから。

私はうっかりさらに歳取った父が登って来るには、確かにこの登りはきついなどと悠長に考えていたのだ。それほどに父がいなくなることは、まだまだ現実味のないことだった。

「下の道路の脇の畑がえいと思ひゆうけんど、おまんはどうよ」

「そら、下やったら掃除やお参りは楽でええねえ」

「あとのもんに世話かけるのも申し訳ないきねや。」

「けんど、少々近こうても遠うても、墓参りせん人にはあんまり関係ないと思わんかえ」

「そんなことは考えなや。おまんの息子らあが年一回来るにしても、やっぱり下の方が楽ぞ」

父の思いを理解した私は、消極的な同意をしたまま話を具体化させることなく放置した。もちろん父も、まだまだ先の話ということで急ぐふうはなかった。

それは、暮れから例年になく厳しい寒さが続いていた二月初旬の早朝だった。

朝ごはんができたことを告げに両親の寝起きする母屋に入った瞬間に感じた冷気が微妙にこれまでと違っていた。空気がぬるかったのだ。

冷え込みの厳しかった朝だったので、何かが変だなと思いながら部屋に入ると、三十度近くはあろうかという熱気が顔を押しした。母はいつものように穏やかな寝顔を浮かべ自らのベッドで休んでいた。

もう一つのベッドでは、父が座って項垂れしきりに向う脛辺りをさすっていた。それもパンツ姿で。足元には突然魂を抜かれたかのようにパジャマのズボンが力なく折り重なっていた。私は父に近付き肩に手をかけた。

「ご飯できたよ」

父は返事をしようとはしなかった。

ただ、ううっと音を出し続けていた、それは、声になる前の助走のような音だった。例えば、「おお、そうか」かもしれない。

「分かった。食いに行くぞ」かもしれないなかった。

しかし、父をよく観察すればすぐに理解できる状況だった。「早う病院に連れて行ってくれ」だと。

よく見るとパンツもパジャマもどこか黒ずんだ澱のようなものがこびり付き乾燥していた。

「親父^{おやじ}さん、大丈夫かえ？」

もう返事がないことは分かっていたが、何度か呼びかけすぐに部屋の電話で救急車を呼んだ。

父が運ばれた後、何事が起ったのか理解できていない母をデイサービスに送り出し廊下のトイレを覗いてみた。そこには夥しい量の真黒な澱が、私に助けを求めるように飛び散っていた。

夏も終わりに近づいた八月下旬、私は草刈り機で伸び放題になった葛などの植物を刈り取っていた。

萱^{かや}の株は年々成長し、素晴らしいススキの穂を秋風にそよがせてくれる。

けれど、この高台を墓にするならば根こそぎ取り除かなくてはならない。根を残して基礎を造ったなら恐ろしいことになるだろう。

『親父^{おやじ}さん、ここからの眺めは最高やねえ。僕をいつも助手にしてアユを捕ったのを覚えちゅうかえ。早う走れとか、そこを動くなよ静かにしちよれとか、もっと石を投げろとか、よう叱られたけど、僕は今一人で捕りゆうで。アユを追い立てる役がおらんでもアユは捕れゆうきねえ。あれは、やっぱり一緒に川に来てほしかっただけとちがうかえ。』

私は川を見下ろしながら、子どもの頃の思い出をあれこれと辿っていた。

川が緩くカーブする辺りには大きな淵があり、子どもの頃は恐ろしくて近付くこともできなかった。淵の対岸には砂が集まり大きな川原を形成していたが、砂は淵に吸い込まれるようにずるずると私の足を深みへと引きずり込もうとした。

父も危険だと思ったのか、この淵近くで網を投げることはなかった。

この頃の父は耳を悪くしていて潜ることができなかった。そう聞かされていた。もし私が溺れて沈んだとしても潜って助けることができないと思っていたのかもしれない。

その淵の少し下流は、深いけれども比較的川底が平らで大きな石ころの並ぶ深みだった。私がまだ泳げない頃、父は私をそこに連れて行き手を離れたことがあった。

なんて酷いことをするのだろうと思ったものだが、それは気の短い父が私に泳ぎを覚えさせようとしてとった、たった一回の行動だった。

明日は鍬やシャベルなどで草の根をきれいに取り除こう。それが済んだら下地になる基礎のコンクリートを打とう。軽トラで運んだとしても、結構大変な作業になるかもしれない。

(やめちよけや。腰を痛めるぞ)

『のんびりやるよ。今年中にはできると思う』

墓をここに造ったとしても、父がここにいるわけではないだろう。

大切なのは、父がきつとこの景色を喜ぶだろうという残された者たちの思いだ。

私にしてみてもこの景色には愛着がある。

私の魂も墓には納まらないとは思いますが、私が生きている限りはこの場所を守って過ごそう。

『その端っこに柿の木を植えようか』

(やめちよけや、ふけて掃除が大変ぞ)

『けど、秋に墓に来る理由ができてえいろう』

(お供えを柿で済ます気かえ)

大川の背後には高さ百メートルほどの小さな山がここと向かい合って立っている。この前まで山にいたアキアカネは平地に降りてしまったらしい。見下ろすと、所々にススキが穂を伸ばしている。残暑が厳しいとはいえ秋は確かな足取りで近付いていた。

刈り取った草や蔓をまとめて梅の木の根元に置き、基礎を打つ場所を確認した。

「やめちよけよ。ようせんなるぞ」

何処からか、父の声が聴こえてきたような気がした。

振り向いた私は、いつの間にか西の空が紅く染まり始めているのに気付いた。

『ここからの夕焼けもなかなかえいねえ』

(やめちよいたほうがええぞ)

私の中の父は、まだ心配しているようだったが、やめろとは決して言わないことを私は知っている。